

2022春東北、アートの現在地

東日本大震災から10年を経るなかで起きたパンデミック。昨年度に比べると落ち着いて向き合えるような、どこか節目のような時節のなかで、東北のアートの現場にはどのような動きがあったのでしょうか？

大きな出来事として、青森では「弘前れんが倉庫美術館」*1、「八戸市美術館」*2が新しくオープンし、十和田市現代美術館や青森県立美術館、国際芸術センター青森(ACAC)とあわせ、青森アートミュージアム5館連携協議会も発足されました。秋田では秋田公立美術大学が中心となって意欲的な試みや人材育成がはかられているなか、新たに「秋田市文化創造館」*3がオープンし、より豊かな環境が生まれています。また、福島では「プロジェクトFUKUSHIMA」*4、宮城県石巻市女川町では「Reborn Art Festival」*5、岩手県沿岸部では「三陸国際芸術祭」*6などの大型フェスティバルも継続して開催されています。また、地域に根ざした活動として、山形県折温泉の「ひじおりの灯」*7、仙台市内での「仙台写真月間」*8、「せんだい21アンデパンダン展」*9などが挙げられるほか、石巻市では中心街にある

ギャラリーがそれぞれ活発な活動をおこなっています。盛岡市では官民連携によるプロジェクト「盛岡という星で」の拠点施設「BASE STATION」がオープン*10。盛岡のアートシーンを牽引してきたCyber art galleryも同フロアに移転し、地域の若者を巻き込んだ多様な活動が始まっているようです。震災後に生まれた拠点や活動のなかには、コロナ禍も含むこの10年で区切りを迎えたり、形を変えたりしているものも。しかし、そのなかでもアートを通して社会を考えていくために、新しい拠点づくりや、ジャンルを超えた協働の試みが確かに生まれています。「2022春 東北、アートの現在地」では、2021年度に東北で開催された現代アートの展示・プロジェクトについて、主に東北各地を拠点とする方々にレビューをしていただきます。ここで紹介できるものはごく一部ですが、本レビューをもとに東北各地のアートの現場と接続し、今後関心をよせるきっかけとなれば幸いです。

*1:2020年7月開館、青森県弘前市 *2:2021年11月開館、青森県八戸市 *3:2021年3月開館、秋田県秋田市 *4:2011年から実施、2021年度、プロジェクトのひつとつであるフェスティバル FUKUSHIMA 2021は8月15日-10月17日で開催、福島県福島市 *5:2017年から実施、前期2021年8月11日-9月26日、後期2022年8月20日-10月2日、宮城県石巻市、女川町 *6:2014年から実施、2021年7月-2022年3月開催、三陸沿岸地域 *7:2007年から実施、夏期 2021年7月17日-9月22日、秋期 2021年9月11日-10月10日、山形県最上郡大蔵村 *8:2001年から実施、2021年8月31日-10月3日、宮城県仙台市 *9:2012年から実施、2021年9月29日-10月10日、宮城県仙台市 *10:2021年7月開館、岩手県盛岡市



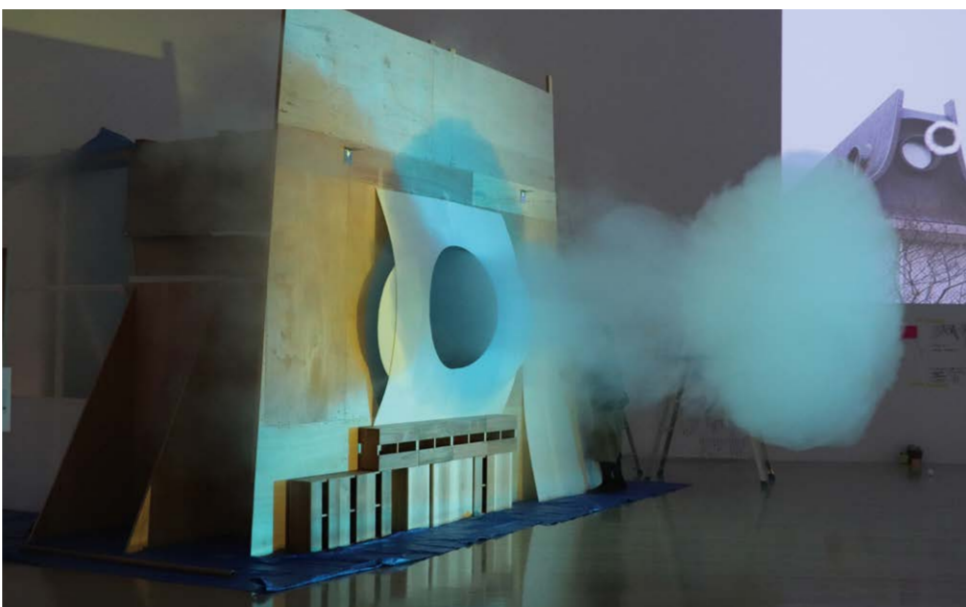
01 / 八戸市美術館開館記念「ギフト、ギフト」



02 / 石田貴裕個展「parallel translation」



03 「ナラティブの修復」展



04 / クリエイター・イン・レジデンス「o0」

01 青森

八戸市美術館開館記念「ギフト、ギフト」

八戸市美術館開館記念「ギフト、ギフト」

レビュー／中川千恵子

昨年リニューアルオープンした八戸市美術館では、2月20日まで「ギフト、ギフト」展が開催された。本展は、八戸を代表する祭りをあつらえた八戸三社大祭を地の創造を生み出す重要な文化であり、貨幣経済では生み出せない「ギフト」をもたらし出すと捉え、浮世絵や現代の表現者たちの作品による複数の視座を提供した。

像で構成されている。展示空間に対して不自然なまでに低い天井と2本の柱で形成された造形物は、デパートの空きテナントの一角を忠実に再現している。雨漏りの痕跡や、寿命が近い蛍光灯の点滅、ひび割れた床のタイルなど、現実には存在する空間をそのまま移設したような姿は、八戸のみならず、地方経済の衰退の表象として捉えられる。田村は「ギフト」から、デパートでの購買がamazonのようなネットショッピングに代わられる消費形態の変化に着目した。モニターに映される映像では、その変質を端的に表すデパートと

「ギフト」とは、経済活動の変化によって文化にもたらされるあらたな光景のことなのだろうか。この「ギフト」が持つ両義性は、同名のマルセル・モースの著作から名付けられた展覧会名に示唆されている。本展の説明文で、いくつものゲルマン語系の語彙で「ギフト」が「贈り物」だけでなく「毒」の意味を含むという、贈りによる人と人との結びつきは、「絆」もしくは「縛り」と捉えられるだろう。ただし、本展では、展覧会名に読める明確な意図に対して、控えめな指摘に終始した印象を受けた。もし、「ギフト」に対する批評的な態度を展示会場に明確に見出すことができたなら、既存の文化の賞賛という文化のみならず、変質していく文化やまちについて思索を深めようという問いかけがなされたのではないだろうか。

02 岩手

石田貴裕個展「parallel translation」

レビュー／鈴木研作

感染拡大が懸念される4月下旬、北上市のNAKAIMA ART SPACEにおいて完全予約制で開催された。会場は書家の中嶋敏生が2019年にオープンした企画ギャラリーで中嶋のアトリエも兼ねている。展示室は自然光が入り明るく開放感のあるアトリエと奥に続くギャラリーに分かれており、6点の絵画と1点の立体が展示されていた。

石田は作家として活動して以来絵画にこだわって制作してきたが、活動を続ける中「絵画だけでは足りない」と考え、絵画への肯定と否定の感情を抱えながら制作する。今回の展示はその葛藤が現れているように感じた。絵画作品は人物や記号などの画像が画面全体に配置され映画フィルムや動画の編集集のような状態を思わせる。重ねられたグラデーションの色彩や金属のフレームが目を引き、個別のモチーフがわかりやすく作品の強度も高めている。その意図は判然としない。そこで絵の構造に注目すると基底材はキャンバスが用いられているが人物などの画像は印刷物の転写によるもので、描くことや絵画を否定しているようだ。その上にはストライプ状のレイヤーが画面を覆い全体の印象を絵画らしく演出している。さらに金属の構造体がキャンバスの上下に取り付けられているが、縞線のように絵を引き立ててはいない。むしろ出しの金属の質感は鑑賞者の障壁となる存在を放ち、ある作品が部分的に画面を遮る。それによって視られることを拒んでいるようで、絵画と非絵画を用いた問いかけの応酬が読み取れる。

「ギフト」の読み方に決まりは無い。しかしながら物語とは本来、可塑的なものであり、受け継がれるなかで姿を変えていくのがもともとあり方である。その意味では「壊れたナラティブを修復する」は間違った問題設定である。ナラティブは壊れない修復も必要ないからだ。だがしかし……この展覧会は東日本大震災を直接の主題としていないが、それによって10年のおりに企画されたことを願うならば、「壊れたナラティブを修復する」ことは切実なトーンを帯びてくる。だとすれば、鑑賞者はその切実さを作家とともに受けとめなければならぬ。聞こえない声や音、見えない風景を想像する作業は、ナラティブを修復し、物語になややかな可塑性を取り戻すことにつながるだろう。その作業は鑑賞者の側に委ねられているのである。

03 宮城

「ナラティブの修復」展

レビュー／門林岳史

声、声、声。声、声、音、音……。 展覧会場内にはたくさん声の音が聞こえてくる。流行歌を口ずさみながら自分たちの来し方を回顧する女性たちの声（磯崎未菜（Shizuka Ueno Voice Network）。11歳の頃の記憶について語るたくさんたち（小森はるか十瀬尾夏美（11歳だのわたしは）。やや奥まった部屋に足を踏み入れると、失われようとしている住居の物音（佐々木 追廻住宅記録 / 最後の家（飯）や、即興人形劇のユーモラスな会話（工藤夏海（まちがいの劇場）も聞こえてくる。ある一角にはシュールなキオスクのような建造物があり、その背後でときおり蛙が鳴きはじめる（佐藤徳政（ダイヤモンド・フロック）。会場に長時間たなずんでいると、流行歌のノスタルジックな響きに蛙の鳴き声が重なりあう美しい瞬間を何度も経験するだろう。

たちがどのような音を奏でるのか想像をめぐらすことになるのである。作品を囲む壁面には、八百年の時を隔てた二人の芸術家による架空の対話が展開されている。そこには以下の言葉がある。「楽器は昔のないときにこそ風景を現す。同じことが他の作品にも言えるだろう。家族とともにあった風景（阿部明子（父の家（小田）と私の家（三浦））や駿とともにあった港の文化（是恒さくら（鯨を解き、鯨を編む）。あるいは伝説のアーティストが生きた時代（タカカノ 糸井寛二の日々）に想いをほせること。展覧会場中央に草原のように配置された絵画群（菊池裕太郎（荒れ地について）は、それら無数の見えないものと見えるもの、聞こえないものと聞こえるものをなごみと溶けあわせる役割を担っているように思われた。

「o0」の読み方に決まりは無い。しかしながら物語とは本来、可塑的なものであり、受け継がれるなかで姿を変えていくのがもともとあり方である。その意味では「壊れたナラティブを修復する」は間違った問題設定である。ナラティブは壊れない修復も必要ないからだ。だがしかし……この展覧会は東日本大震災を直接の主題としていないが、それによって10年のおりに企画されたことを願うならば、「壊れたナラティブを修復する」ことは切実なトーンを帯びてくる。だとすれば、鑑賞者はその切実さを作家とともに受けとめなければならぬ。聞こえない声や音、見えない風景を想像する作業は、ナラティブを修復し、物語になややかな可塑性を取り戻すことにつながるだろう。その作業は鑑賞者の側に委ねられているのである。

04 秋田

クリエイター・イン・レジデンス「o0」

レビュー／芦立さやか

旧県立美術館を改修し、多目的な用途で活用可能なスペースとして2021年3月にオープンした秋田市文化創造館。館主催による2ヶ月間の滞在制作プロジェクト「クリエイター・イン・レジデンス」の最初のゲストとして選ばれたのは、昨年度に秋田市中心市街地を舞台とした企画公募「SPACE LABO 2020」でランプリを受賞した、現代美術家の松田佳佳（ちか）とファンリキーターの雨宮澤によるユニット「CHIKAWAMO MOCHI」。かつて美術館時代に、藤田嗣治による大壁画「秋田の行事」が展示されていた吹き抜けの大空間には、自然光が差し込むように天井付近に丸窓がある。その丸窓から外へ空気砲を打ちたいという彼女たちのプランを実現させることが今回のプロジェクト「o0」。彼女たちが理想とするイメージの空気砲を打つことは現状の建物の構造上ではほぼ実現不可能だが、事務局曰く「もしかしらば」20年後におこなわれる（かもしれない）屋根のメンテナンスに際し、外側から空気砲の装置を仕掛けることができるかもしれない、という想定のもと、試行錯誤は始まる。

「もしかしらば」の20年後の未来を実現させるため、実物大の窓の模型を制作し、対話型のワークショップ「SUNDAY DONUTS」を毎週開催しつつ、ふたりのハンドパワーを提供するなど、時には見えない力も頼りながら、彼女たちは「MOCHI」のメンバーを増やし、共に手を動かして、想像する。プロジェクト名の

「o0」の読み方に決まりは無い。しかしながら物語とは本来、可塑的なものであり、受け継がれるなかで姿を変えていくのがもともとあり方である。その意味では「壊れたナラティブを修復する」は間違った問題設定である。ナラティブは壊れない修復も必要ないからだ。だがしかし……この展覧会は東日本大震災を直接の主題としていないが、それによって10年のおりに企画されたことを願うならば、「壊れたナラティブを修復する」ことは切実なトーンを帯びてくる。だとすれば、鑑賞者はその切実さを作家とともに受けとめなければならぬ。聞こえない声や音、見えない風景を想像する作業は、ナラティブを修復し、物語になややかな可塑性を取り戻すことにつながるだろう。その作業は鑑賞者の側に委ねられているのである。

2021年は、かなりの数の延期していた展覧会が一斉に開催された印象がある。特に秋頃の県内は展覧会ラッシュだったように思う。

旧石井県令邸は明治18年から19年頃に建設された全国的に初期の洋館で、現在は展示会場や撮影スタジオとして活用されている。特に美術の発表の場として県内で貴重な存在となっている。石川優太、絵画全貌「逆再生、祝祭、手拍子」も旧石井県令邸の企画として2020年に開催される予定だったが、新型コロナウイルスの影響を鑑み延期しており、2021年の開催に至った。

石川優太は、絵描きであり料理人。今回「絵画全貌」と謳うと約16年間の作品が、年代ごとにそれぞれの部屋に分けられ全館に展示された。最初期のものは高校生の頃描かれた自画像で、展示室としては初公開となる屋根裏下の小部屋が会場となった。特に存在感を放っていたのは、1階の広い部屋に展示されていた具体的モチーフをもった最新作の絵画。作品は年代ごとに異なる作風となっており、そのテーマは「遊び」を必ず

05

岩手
旧石井県令邸企画展
「石川優太絵画全貌」
「逆再生、祝祭、手拍子」

レビュアー／千葉真利

要としくなってきたことがうかがえる。そうした経緯が露わにみえてくる構成であり、会場の雰囲気も存分に活かされていた。現存するひとりの作家に焦点を当てたことでの規模で網羅した展覧会であったことにも驚いた。

石川作品の主題は、料理人でもある彼にも共通している。自身の店と絵画を「留まることなく移ろう時間。そこに存在する生命。そして、それらの関係性」と展覧会に寄せた言葉で述べている。1枚のキャンバス、1枚の皿のうへに広がる無数の時間を、石川は絵画や料理によって捉えようとしている。

本展を企画した旧石井県令邸の管理人である千葉幸子は、石川とは古くからの知人だったが、個展開催を決めかけたきっかけとして、石川の営む料理店に訪れ「料理を食べているときに、つくろ方や出し方が絵と重なった」ことを

挙げていた。

そして、展覧会のDMとしてアーティストの鈴木健一が手掛けた「函」も特徴的だった。箱型のDMのなかには、展覧会の案内、作品のポストカード、そして流木が赤い薄紙に包まれて入っていた。なにやら良い香りをかぎながら、この「函」も展覧会の世界観を詰め込んだ作品のひとつだったのかもしれないだろうか。

最後になるが、旧石井県令邸での石川優太の個展は第2弾も計画されているという。第2弾では最新作を中心とした構成となる見込みだそうです。とても楽しみです。

旧石井県令邸企画展 石川優太絵画全貌
「逆再生、祝祭、手拍子」
2021年10月5日～13日
会場：旧石井県令邸



05 / 旧石井県令邸企画展 石川優太 絵画全貌「逆再生、祝祭、手拍子」 撮影・伊藤 隆宗



07 / やないづの家宝展2021



06 / 工藤結依作品展「余熱(ほとぼり)」



08 / 中山町の新しいおまつり「トリキヨリまつり」を考えよう!



09 / 八戸アークセンター開館5周年記念ギャラリー展「中高生に伝えたい三浦哲郎」

「中山町の新しいおまつり「トリキヨリまつり」を考えよう」は、山形県中山町を拠点に、ものづくりワークショップをおこなっているインザワークスさん(マルイン工作室・主宰)が企画するプロジェクトだ。インザワークスさんによれば、本プロジェクトは、「人と話す時は距離を取る」「直接触れ合えない」などの、新型コロナウイルス感染症の拡大によって生まれた制約を、「新しい遊びのルール」と転換させることで、見える世界が変わってくるのではないかと、この思いつきからスタートしたという。全4回のミーティングを通して、「距離を取ることを条件とした」「距離を取って楽しむ遊び」を子どもたちが考え、準備し、最終的にイベント「トリキヨリまつり」を開催し、町内の子どもたちにその遊びを体験してもらい、「遊び」とする事で、参加者の意識を「先生と生徒」教える側

08 山形

中山町の新しいおまつり
「トリキヨリまつり」を
考えよう!

レビュアー／田中望

と教えられる側」のような関係ではなく、子どもたち一人ひとりが企画に関わって自分が社会とつながっているという実感を味わってほしい、主体的に学び合う場を体験してほしいという思いがあるそう。

参加者は、中山町の2つの小学校に通う3年生・5年生の子どもたち7名。イラストや文章でイメージを描き出したリスト、ランドラムに集められた素材(ビニール傘、ホルス、リボン、紙包、段ボール、ビーズ等)に触れながら、感染症対策とものづくりを融合させた遊びのアイデアを膨らませていく。2回目のミーティングでは会場にモニターとタブレットを設置し、相談役としてふたりの、オンライン魔女(あさみさん、鴨田かもしん)がZOOMで常駐。子どもたちが相談したい時にいつでもモニター越しに話しかけることができるようにした。



10 / 志賀理江子「DOING NOTHING BUT STUDIO OPEN」

3回のミーティングを通して4つの遊びが考案され、最終イベント「トリキヨリまつり」に向けての準備も進んだ矢先、山形県内でもコロナが再拡大、イベントは延期となった。その直後、インザワークスとオンラインで対話をさせていただいた。コロナ禍で試みたことの実感として「集客数を重視していた自分の認識に変化があった」という言葉は印象的だった。特に行政からの補助を得て行うプロジェクトなどでは、その成果を、数字として見やすい来場者数に求められがちだが、人を集めてはいけないという条件になったことで、集客に捉われず、内容の充実をはかることや、少数の関わりだからこそできる一対一での対話の機会が増えたように思う。人と物、合理的な距離を取ることが、人との関係希薄にするどころか、むしろ人と人の関わり方をより強く考えることになっていると感じた。

中山町新しいおまつり
「トリキヨリまつり」を考えよう
2021年10月5日～2021年10月24日
コロナ対応可能
会場：中山町

06

秋田
工藤結依作品展
「余熱(ほとぼり)」

レビュアー／小倉拓也

身体はつねに熱を持ち、熱は意識されざるまま、言葉以上に身体を語る。私たちは普段、身体を置き、ときに身体を越えて交換される。文字と対峙し、死活的なこのエネルギーをそれとして意識することは少ない。

本展は、熱に反応して状態変化させる科学素材を用いた展示物とパフォーマンスによって、作家と鑑賞者の熱を、物において、痕跡というかたちで可視化し、身体を隔てる距離を越えて共有する試みである。

会期前半「ひそむ」では、そうした素材を用いたカーブ、パネル、クッションなどによって、生物の細胞を想起させる空間が構成され、そこにいる作家と鑑賞者の熱が、細胞の活発であったり静かであったりする動きのように浮かび上がる。後半「つたう」では、薄暗い空間に何

箇所が張りめぐらされた管に、一箇所にその明かりが灯され、透明な液体が注がれる。その液体はやはり作家と鑑賞者の熱で白く凝固し、熱を放しほけ、明かりが消える。明滅する無意識の働き。いづれの場合も、身体の内を思わせる空間に、身体の熱が外化されてみえるという、パロディシカルな状況が生み出され、熱をめぐる身体の内と外、そしておそら作家がより広く捉えようとしている生体、他者、世界のあいだの循環や包含の関係を注意が向く。

評者にとって興味深かったのは、身体と熱の関係が無媒介的なものであり、その熱を可視化し共有する行為も「触れる」という直接的な担保を受けていないながらも、その可視化と共有が根本的に技術的に媒介されており、最後には視覚的に

07

やないづの家宝展
2021
レビュアー／小林めぐみ
福島

木の枝にさがる色とりどりの飾り。会津に長くいれば小正月の頃に必ずお目にかかる「団子さし」。宙に浮かぶ凧とした気配がする凧のようなもの。添えられた小さなキャブションには「麻殻のたいまつ」とある。アクリルケースに鎮座するねじれた白い木綿。傍らには「下着」の文字。展示手法の苦勞が偲ばれてつい微笑む。その背後には人間ほどもある「藁人形」。やや向かい合うような配置の2体。あつからんとした生殖器の表現は土地の信仰と結びついているだろうかを伝えている。

福島県柳津町にある斎藤清美術館の一角で開催されている「やないづの家宝展2021」は、いくつかの「モノ」が謎かけのように現れる展示だった。鎮古な説明を近くに持たないそれらをめぐる。ゆつくりとモノに對峙して周囲に目を移すと、控えめにしかし丁寧にそれらが何かを教えるような言葉と画像と映像があった。印象的な言葉と写真と共に大きく壁面を飾り、小さなモニターに流れる動画からは文化をつないでいる現場のリアルな声が微かに聞こえる。展示物と紐づくりサーチライトの記録。ヒアリングの一部はピックアップしたのだから地域の人々の言葉は、「(コロナ禍でも)文化を継承することの

形のないものを対象とし、しかもそれがその土地にとってどんな存在であるかを伝えようとした。博物館であれば数多の資料と言葉と記録映像によって構成するだろうそれを、3人は軽やかに情報を削ぎ落として、抽出したエッセンスを美術的な手法で提示した。

ここ数年斎藤清美術館には、美術系大学を出た地域おこし協力隊が所属され、地域と美術館をつなぐ役割を期待されてきた。「やないづの家宝展」はその中で生まれた成果のひとつで、柳津ゆかりの版画家・斎藤清が愛した柳津の暮らしを斎藤清と同じ異郷者の視点で掘り上げようとするものだった。地域の人々に自分達が暮らす土地の魅力や、町外の人々に柳津町の歴史と文化の豊かさを、あらためて教えてくれる好例の場になりつつある。3年目となる今回、展示はより空間表現性を高めたインスタレーションとして開花した。若手作家の表現の場としての可能性も持った「やないづの家宝展」、今後も注目していきたい。

やないづの家宝展2021
2021年12月11日～2022年4月10日
会場：斎藤清美術館

09

青森
八戸ブックセンター
開館5周年記念ギャラリー展
「中高生に伝えたい三浦哲郎」
レビュアー／大澤苑美

八戸ブックセンターは、八戸市が運営する「本のまち八戸」の拠点である。市営の本屋と言いつつその特殊性が際立つだろうか。独自のキュレーションで本が並び、偶然あるいは必然的に場所と出会う。知的好奇心くすぐる場所だ。

ここにある小さなギャラリーで開催された「中高生に伝えたい三浦哲郎」三浦作品をあまり知らない若者世代に向けて、八戸出身の芥川賞作家・三浦哲郎を紹介し、読書へと誘うもので、その展示監修を「本を影る」彫刻家で田中義久とのユニットNaitoでも活躍する飯田竜太が手がけた。

展示の中心は「盆土産と十七の短篇」。各短篇から抜書きされた物語の節と合わせて、そのイメージを増幅させる

オブジェ「たとえば、エビフライやクリムソータの食品サンプル、木刀、玩具など」が本の影刻に添えられたそのキッシュに目が留まる。その彫刻映像からは「えんびいふらあ」と心な感じ。入口には「盆土産」を讀んだ中学生によるビジュアルなキャッチコピーの群が手を伸ばしている。

字であらすじが書かれた紙束が釘で留められていて、ビリッとちぎって持ち帰ることができた。とにかくあららちらに三浦哲郎小説へとつながるドアの取手が用意されている。

「中高生のための企画」とは言うものの、こういう類は、知ったかぶりをして後ろめたさを持つ大人にこそやうどよい。かくいう私も、その一人。八戸市美術館開館記念「ギフト」で、八戸のアーティストをめぐる作品を制作したアーティスト田村友一郎がリサーチの途中、八戸のデパートにまつわる本があとと見つけてきたのが三浦哲郎の「ありえん」。「ばらだいたい」を古本を買って讀んだのだ。

八戸ブックセンター開館5周年記念ギャラリー展
2021年12月22日～1月22日
会場：八戸ブックセンターギャラリー

10

宮城

志賀理江子
「DOING NOTHING BUT STUDIO OPEN」
レビュアー／清水チナツ

宮城県北の美里町小田。仙台から向かうと目に映る大半が空になり、田圃が広がる。東北本線、石巻線、陸羽東線が交差する最寄り駅の小田駅は、鉄道の要所としてかつて賑わったが、今はずいぶん静かだ。国道19号線沿いには、他の街のそれと同じようにホームセンターやドラッグストア、大型スーパーが建ち並び、その斜向かいにある廃業したパチンコ店の建物で

が、アーティスト志賀理江子のスタジオ「STUDIO PARLOR」だ。志賀は2015年からここを制作のためのスタジオとして活用し始め、2021年8月から「DOING NOTHING BUT STUDIO OPEN」と称して、オープンスタジオをおこなっている。この試みは、2020年春先から今なお続くパンデミックと決して無関係ではない。外出規制や、休校、活動自粛などさまざまな形でおこなわれる感染対策は、子どもたちも対象となり、学校では黙食が基本。授業はときどきにオンラインにも移行し、放課後に友だちと遊ぶことも制限されるようになった。目に見えず、匂いを嗅ぐこともできないウイルスに対して万全を期すならばもちろん、部屋にこもり、誰とも接触しないに越したことはない。

に開いたのだ。昨年の8月からは毎週日曜日の10時から18時まで、その扉が開いていて、誰も訪れることができる。遠方からの来訪者も稀にあって、大半は近隣に住む子どもたちとその父母だ。元パチンコ店の屋内は天井が高く、体育館のように広々としていて、ライブラリーには、絵本や図鑑、写真集や美術書などさまざまな本が並んでいて、「何もしてないけれど、スタジオは開いています」の言葉通り、特にプログラムが組まれているわけでもない。空き地のようにただ開放されている。そこで子どもたちはただドミントンや鬼ごっこをしたり、絵を描き本を讀んだり、寝転んだりしている。志賀は、そこで撮影の実験や、作品制作の打ち合わせをおこなっている。子どもたちを見守りながら、父母たちは井戸端会議。公に開かれた場ではあるけれど、サービスを提供する場ではない。災厄の中でも、それが共に在るバランスを試行錯誤の中から編み出し、肌感覚を鍛えることが、世界に自由と自治の域をつくるのだと、このスタジオに立つと実感された。

志賀理江子「DOING NOTHING BUT STUDIO OPEN」
2021年12月22日
会場：STUDIO PARLOR

